

J. S. ブルーナーと心を見る眼

横山 草介

J. S. Bruner and an Exploring Mind

Sousuke Yokoyama

要旨：

本研究は、Bruner 心理学の根底に根づく方法論の解明に取り組むものである。本稿では特に、Bruner 文化心理学の宣言書と目される『意味の行為』に読解の焦点を当てる。論究を通して解明されることは、Bruner の「意味の行為」とは、前提や常識、通例性の破壊として定義される混乱状況に対峙した精神が、事態の再安定化を志向し、平静を取り戻そうとする手続きとして理解することができる、ということである。本研究ではこのプロセスを精神の「混乱と修復のダイナミズム」と呼ぶ。Bruner はこのプロセスが解釈と意味という概念を、文化心理学の探求の中核に位置づけることになる主張した。我々はこの言明の先に、Bruner 心理学の平和への眼差しを読み取る。

キーワード：

Bruner 意味の行為 混乱と修復のダイナミズム ナラティブ 文化心理学

1. J. S. Bruner と心を見る眼

2016年6月5日、心理学者 Jerome Bruner はその100年に渡る生涯を閉じた。Bruner の仕事は、一世紀に渡る心理学のその時々時代の精神に呼応するように漸進し、多くの学術的遺産を遺してきた。今日の我々は彼の知的遺産の中から自らの学術的志向に適う諸概念——たとえば、スキヤフォールディング (scaffolding)、共同注意 (joint attention)、ナラティブ (narrative)、意味の行為 (acts of meaning)、フォークサイコロジー (folk psychology)、可能世界 (possible world) といった諸概念——を取り出し、馴染みの引用符とともにそれらを使い勝手のよい理論的道具として利用することが出来る。だが、このような利用は Bruner が当初考えていた道具の使い道を、その応用と呼ぶには

あまりにも遠い所へと引き剥がしてしまうリスクを常に内包している。

また、使い勝手のよい理論的道具としての遺産の利用に関心が集中するとき、Bruner が一人の心理学者として人間の精神に対峙する際に垣間見せた、姿勢、眼差し、言葉を換えて言えば、Bruner 心理学の方法論への関心は次第に薄れていくことになる。こうした懸念に対し、本研究は Bruner 心理学の根底に根づく方法論の解明に取り組むものである。ここで言う方法論とは、ある人がものごとを理解しようとする、その仕方を指す。

2. 心理学者 Bruner の来歴

Jerome Bruner [1915-2016] は、1915年10月1日、ニューヨーク郊外の富裕なユダヤ教徒

の家庭に生まれた。アメリカ心理学界においては行動主義が主流を為していた1933年に米国デューク大学に入学し、学士課程を3年で終え、1年早く大学院での研究生生活を始めている。デューク大学では、AdamsやZennerといった論客の講義を通してゲシュタルト心理学を学び、その考え方に影響を受けた。1938年にデューク大学の修士課程を終え、同年の初秋、ハーヴァード大学の博士課程に進学する。1939年には第二次世界大戦が勃発し、Brunerが学位論文の研究に取り組み始めた1940年代初旬は既に大戦の最中であった。このような状況下において彼の学位論文は交戦国のプロパガンダ放送の言葉に現れる軍事情勢と精神状態の質的調査を主題とするものであった。1941年6月、彼は学位論文を仕上げ、その直後には連邦通信委員会直属の外国放送監視施設に勤務し、戦時中は情報局などの仕事に携わっている。そして終戦の翌年にあたる1946年から彼は母校ハーヴァードで教鞭をとることになる。

この1946年以降を彼の心理学者としての本格的な研究生生活の始まりと見ることができる。

その後のよく知られた仕事として、1940年代後半に一連の共同研究として着手された知覚研究（ニュールック運動）、1950年代中頃にかけて行なわれ、後に認知革命の狼煙と目されることになる『思考の研究』（Bruner, Goodnow, & Austin, 1956）、1959年には、後に教育の現代化運動の嚆矢と呼ばれることになるウッズホール会議の成果報告書『The process of education』（Bruner, 1960）をまとめ、1960年代には、Piaget課題を用いた子どもの認知発達に関わる比較文化研究をジュネーヴ、ケンブリッジ、モスクワ、セネガル、メキシコに渡って展開し、児童期の認知機能における文化の役割を検討した（Bruner, Olver & Greenfield,

1966）。これらの研究は、1960年にGeorge Millerと共に設立したハーヴァード認知研究センターがその活動拠点となっている。

1972年、彼はハーヴァードを離れ、乳幼児の言語発達とその使用についてのより機能主義的な研究を求めて英国オックスフォードに移籍する。オックスフォードでおよそ8年に渡って行なわれた乳幼児の言語獲得研究は、家庭の中で日常的に営まれている母子間の前言語的、言語的相互作用の徹底した観察研究であった。この時期の研究成果の一つとして報告された母子間の「共同注視（joint attention）」（Scaife & Bruner, 1975）の発見は、その後の乳幼児発達研究、心の理論研究に大きな影響を与えた（Bruner, 1983a; Scaife & Bruner, 1975）。

今日、我々がナラティブ心理学や文化心理学の嚆矢としてBrunerの仕事の評価する際にその議論の指標となるのは、主に彼が乳幼児言語獲得研究に区切りをつけ、オックスフォード大学を退官した1980年以降の仕事にあたる。1980年以降の主要な仕事として英国での乳幼児言語獲得研究における成果をまとめた論文集『Child's talk』（Bruner, 1983a）、自らの研究人生を振り返って綴られた知的自伝『In search of mind』（Bruner, 1983b）、心理学に文学評論や解釈学の視座を取り込んだ論文集『Actual minds, possible worlds』（Bruner, 1986）、そして、彼が「文化心理学（cultural psychology）」という呼称を伴って自らの心理学の新たな構想を論じた単著『Acts of meaning』（Bruner, 1990）があげられる。その後、1996年には文化心理学の視座から教育への展望を検討した論文集『The culture of education』（Bruner, 1996）が出版されている。

2000年以降の彼の仕事として、人間の精神生活におけるナラティブの役割とその特質を論

じた『Making stories』(Bruner, 2002)、文化の有する堅固な規範体系とされる法 (law) とナラティブ (narrative) との関連を議論した共著『Minding the law』(Amsterdam & Bruner, 2000) をあげることができる。また、2006年にはBrunerの研究史を教育と心理学という視点から網羅した論文集『In search of pedagogy Volume I・II: The selected works of Jerome S. Bruner』(Bruner, 2006) が編纂された。同著の出版から、彼の研究史に対する学際的称賛を伺い知ることができる。

その後も2016年6月5日にその100年に渡る生涯を閉じる目前まで、ニューヨーク大学ロースタールの教壇に立ち、ナラティブ (narrative)、精神 (mind)、文化 (culture) の結びつきを問う論考を発表してきた (Bruner, 2006, 2008)。

3. 思考の一様式としてのナラティブ

Brunerのナラティブ論の新奇性はナラティブという概念を「思考の物語様式 (narrative mode of thinking) として、「思考の論理-科学的様式 (paradigmatic mode of thinking) に対置される人間の思考様式の一つの有り様として位置づけたことにある (Bruner, 1986, chap. 2)。

Brunerが人間の思考の一様式として物語の概念を定式化したのは1984年8月25日、カナダのトロントで行なわれたアメリカ心理学会 [American Psychological Association: APA]、第一分科会での招待講演である。この招待講演の演題が「思考のナラティブ様式とパラダイム様式 (narrative and paradigmatic modes of thought)」であった。この講演のハンドアウトは1985年にEisnerの編纂による『Learning

and teaching the ways of knowing』(Eisner, 1985) に転載され、1986年にBruner自身の論文集『Actual minds, possible worlds』(Bruner, 1986) の第二章に「Two modes of thought」(Bruner, 1986, chap. 2) と題して大幅な加筆修正が施されて再掲された。

人間の思考の一つの様式としての物語概念の定式化によって同論考はSarbin (1986) の編纂による『Narrative psychology: The storied nature of human conduct』、Polkinghorne (1988) の『Narrative knowing and the human sciences』と共に、今日のナラティブ心理学 (Narrative psychology) の展開における道標の一つに位置づけられることとなった (Murray, 2000)。

心理学は物理学の方法論に倣って、その探求を専ら「論理-科学的 (logico-scientific)」な様式に則って遂行すべきであるという立場に平行するものとして、Brunerは文脈に応じて変化する意味と解釈の多義性に探求の焦点を合わせ、心的事象に係る探求の信憑性を文脈独立的 (context free) な真理性によってではなく、文脈依存的 (context laden) な迫真性 (verisimilitude / lifelikeness) によって担保する「物語的 (narrative)」な方法論に則る心理学の展開可能性を試論した。

以上の要約を鑑みるならば、思考の物語様式 (narrative mode of thinking) に定位した心理学の探求可能性を巡るBruner (1986, chap. 2) の議論に、今日のナラティブ心理学の一つの萌芽を見て取ることができよう。では、「二つの思考様式」として展開された議論はどのようなものであったのか。Brunerの著述を読んでいこう。「二つの思考様式」(Bruner, 1986, chap. 2) は、以下のように書き出される。

初めに、私の論点を出来るだけ簡潔に述べ、それから、その基本的なところと、帰結とを精査していくのがよからう。それは、こういうことである。認知機能、思考の様式には二つの種類がある。各々は経験をまとめあげ、現実を構成するに当たって異なった仕方を提供する。二つ（相補的ではあるが）は、相互に還元されえない。一方の様式を他方に還元しようとしたら、一方を他方の帰結として無視しようとしたらする試みは必然的に思考についての豊富な多様性を捉え損ねることになる。

(Bruner, 1986, p. 11)

Bruner (1986) は論文の冒頭で我々が経験をまとめあげ、現実を構成する仕方には二つの様式があると明言する。そして、両者は相互に補い合うものであるが、相互に還元不可能であるとする。二つの思考様式の共約不可能な共存という彼の主張が「一方か、さもなければ他方か」という単純な二者択一を志向するものではないことは、彼のこれ以降の著作においても同様に認められる立場である (Bruner, 1986, 1990, 1996, 2002)。では、Bruner (1986, 1996, 2002) の主張する「二つの思考様式」の具体は一体どのようなものであったのか。

3. 1. 思考の論理-科学的様式 (Paradigmatic mode of thinking)

Bruner が指摘した思考様式の一つ目が、「論理-科学的様式 (paradigmatic mode / logico-scientific mode)」(Bruner, 1986, p. 13) である。Bruner (1986) によれば、思考の論理-科学的様式 (logico-scientific mode)、これと同義の思考のパラダイグマティックモード (paradigmatic mode) は、物事の説明や記述に際し

て、それらを数学的な仕方で積み上げていくことを目指す思考様式である。つまり、細かな類型化や概念化の手続きを通して複数項の因果関係を証明し、一つの抽象化された普遍体系を構築していくことを目指す思考様式である。思考の論理-科学的様式は主に一般化可能な因果律とその証明とをとり扱っており、経験的証拠に裏付けられた言明を真理として正当化するための手続きを必要とする。Bruner によれば、論理-科学的様式の想像に富む適用は、「優れた理論、簡明な分析、論理的証明、適切な議論、合理的仮説から導かれた実証的発見」(Bruner, 1986, p. 13) を生み出す。

思考の論理-科学的様式が使用する言語は一貫性と無矛盾性とをその必要条件とする。要するに、論理-科学的様式は自然科学が長らく依拠してきた思考様式であり、言わば、特定の自然現象に内在する特質を、精緻な観察と証明手続きに基づいて普遍法則へと昇華していくための思考様式である。この思考様式を人間の精神機能の解明にも適用することができると考えたのが物理学の方法論に依拠し、人間の精神の普遍的特質を解明しようと試みた精神物理学としての心理学の興盛であった。

3. 2. 思考の物語様式 (Narrative mode of thinking)

さて、Bruner が指摘した思考様式の二つ目の様式が「物語様式 (narrative mode)」(Bruner, 1986, p. 13) であった。Bruner によれば、思考の物語様式は小説家や詩人が用いている思考様式である。この様式は、真理の証明というよりは、話の筋の妥当性や迫真性に関心を向ける。物語様式は、「人間の、あるいは人間らしい意図や行為、人間の生を特徴づけている人生の移り変わりやその帰結」(Bruner,

表 1 2つの思考様式 (Bruner, 1986, chap. 2 に基づいて作成)

思考様式	思考の論理-科学的様式 (paradigmatic mode)	思考の物語様式 (narrative mode)
志向	体系立った証明手続きと実験的証拠に依拠して普遍法則の解明を目指す。真理を志向する。	人間の意図や行為、生の移り変わりといった人間の多様な有り様を理解することを目指す。迫真性を志向する。
方法	類型化、概念化、観察、実験、数学的演繹。	ストーリー化、ドラマ化、物語化、経験を選択的、時系列的にまとめあげる営為。
記述の特性	一義的説明を求める。	多義的解釈を求める。
プロダクト	優れた理論、簡明な分析、論理的証明、適切な議論、合理的な仮説から導かれた実証的発見。	優れたストーリー、胸を打つドラマ、(必ずしも「真実」ではないにせよ) 信憑性に富む歴史の説明。

1986, p. 13) を取り扱い、「超時間的な奇跡を、経験の個別性の内に取り込み、それらの経験を時空間の中に配置しようと苦心する」(Bruner, 1986, p. 13)。要するに、小説家や詩人が用いる思考様式は、自然事象を扱う科学者や数学者が用いる思考様式とは全く異なる所産を生み出す。たとえば、「優れた物語、胸を打つドラマ、(必ずしも「真実」でないとしても) 信じるに足る歴史の叙述」(Bruner, 1986, p. 13) といったように。言わば、思考の論理-科学的様式は、特定の自然事象についての普遍の法則や公式が存在するか、しないか、という二者択一に関心を向け、その証明を巡って苦心する。それに対し、思考の物語様式は、単純な因果によっては説明できないような人間の多様な生の実情に関心を向け、それらの個別具体的な生き様の解釈妥当性を巡って苦心する。

4. もう一つの心理学

以上に要約した Bruner (1986) の「二つの思考様式」の議論は、1980年代に Sarbin (1986)

や Polkinghorne (1988) の仕事と折り合わされ、思考の物語様式に定位した「もう一つの心理学」の展開可能性を示唆するものとなった。

では、この新しい心理学はどのようにその研究プログラムを開始すればよいのだろうか。そこで模索されたのは、自然科学の一分野としての心理学ではなく、人文学の一分野としての心理学の展開可能性であった。Bruner (1986) は次のように書いている。

科学は人間の意図や人間の苦境を超えて不変のままに留まる世界を制作しようと目論む。…他方、人文学者 (humanist) は、主にそれを見る者の立場とスタンスに伴って変化する世界を取り扱う。科学は、それを理解しようと求める人びとの生活状態の変化を越えて、事物や事象の不変性と結びついて「存在」する世界を作り出す…。人文学はその世界に住まうことによって求められることを反映するものとして世界を理解しようとする。言語学の用語で言えば、文学ないし文芸批評の研究は文脈依存性を

通じて普遍性を達成するが、科学研究は文脈独立性を通じてそれを為すのである。

(Bruner, 1986, p. 50)

Bruner の考えに従えば、「思考の物語様式」に定位した心理学の探求がその研究対象とするのは「人間の、あるいは人間らしい意図や行為、人間の生を特徴づけている人生の移り変わりやその帰結」(Bruner, 1986, p. 13) である。すなわち、人間の生の多様なダイナミクスをその研究対象に位置づける。このような探求は、仮説とそれを検証するための緻密な実験の手続きを介して、文脈独立的にいつも定まった普遍法則の解明を目指す科学的心理学とは異なる方法論を必要とする。では、Bruner は科学的心理学とは異なる方法論の提起というこの課題に対して一体どのような応答を用意したのか。

人間の状態について人々が持つ理論 (folk theories) は、語りの端々に使われる言葉や比喩の中に埋め込まれている。この種の人々の語り (folk narrative) は、我々が最も厳密な科学的方法を用いて構築するあらゆる心理学理論に匹敵する程度に「現実」を主張する資格を持っている。(中略) このような心理学は、人間の「行為の中の諸理論 (theories in action)」についての、より豊富で、ただしより抽象的な解釈を与えることを課題とする点で、当然のことながら、実証主義的というよりも「解釈学的 (interpretive)」である…。／このことは、我々を真っすぐに人文学者の活動へと引き込むことになる…。

(Bruner, 1986, p. 49)

以上の引用部に明らかなように Bruner

(1986) が、思考の物語様式に定位する「もう一つの心理学」が用いる方法論として依拠したのは解釈学であった。人々が日常の行為の中で使用している理論 (folk theories) の解釈学的理解こそ、Bruner が思考の物語様式に依拠した心理学に課した探求課題に他ならなかった。

5. 解釈学的心理学の構想

そして、思考の物語様式 (narrative mode of thinking) に定位した「解釈学的心理学 (interpretive psychology)」(Bruner, 1990, p. 118) の構想が具体的な形で述べられた単著が『Acts of meaning』(Bruner, 1990) であった。Bruner はこの本を、「多くの点で私の最も新しい考えの表現であるのみならず、いってみれば、心の中に抑え込んできたものの復活である」(Bruner, 1990, p. xv) と書き出した。実証主義的方法論に定位した「科学的心理学」(Bruner, 1990, p. 17) の遂行ではなく、解釈主義的方法論に定位した「解釈学的心理学」(Bruner, 1990, p. 118) の遂行という構想は、長年「二つの思考様式」の間で研究を行ってきた Bruner にとって、疑いなく心の中に抑え込んできたものの復活であったと言えよう。「二つの思考様式」という主張を足場に立ち上げられた解釈学的心理学の構想は、文脈独立的に検証可能な普遍的真理と結びついた物事の説明 (explanation) ではなく、文脈依存的に適切妥当となる迫真性 (もっともらしさ) と結びついた物事の解釈 (interpretation) という方法論に依拠して人々の心に接近する方法を模索する試みであった。この点について Bruner は次のように述べている。

単純な「因果」という観点からの説明

(explanation) に固執することは、人々が自らの世界をどのように解釈 (interpret) し、さらに、我々研究者が人々の解釈という行為をどのように解釈するか、という問題について理解するための試みから、我々自身を引き離すことになる。

(Bruner, 1990, p. xiii)

人々は日々の生活の中で出会う多種多様な出来事をどのように解釈し、理解しているのか。そして、精神の解釈学を立ち上げようとする目論む心理学者は、人々の世界に対する解釈行為を、どのように解釈し、理解すればよいのか。Bruner (1990) は人々の世界に対する解釈行為を解釈するという、二重に解釈学的な問いに対峙する心理学の理論的中心に「意味 (meaning)」という概念を位置づけた。

…人間の心理学の中心となる概念は意味 (meaning) にあり、意味の構成に関与する、その過程と、やりとりにある。

(Bruner, 1990, p. 33)

6. 「意味の行為」の理解に向けて

では、「意味という概念と、意味が共同体の中で生成され、交渉される過程をあつかう精神科学をどのように作り上げるのかという問題」(Bruner, 1990, p. 11) に取り組もうとする Bruner の解釈学的心理学は、如何なる構想として提起されたのであろうか。

Bruner (1990) に従えば、人間の意味生成の過程において人々が使用する媒体は、文化と言語の中に埋め込まれた共用の「象徴システム (symbolic systems)」(Bruner, 1990, p. 11) である。

言語を中心とする人間の象徴システムが発生学的な所産ではなく、文化-歴史的な所産であると考えるとき、Bruner は「人間は文化の中に参加し、文化を通して心的な能力を実現するが故に、人間の心理学を孤立した個人に基礎づいて構築することは不可能である」(Bruner, 1990, p. 12) と明言する。そして、人間の精神機能が文化と不可分であるという前提を敷く限りにおいて、「心理学は人間を文化に結びつけている意味生成と意味使用の過程に照準を合わせて組織されなければならない」(Bruner, 1990, p. 12) と結論づける。

だがしかし、人間を文化に結びつけている媒介的過程が意味生成と意味使用の過程であり、その媒体が言語を主とする文化に固有の象徴システムである、という言明はいささか唐突すぎる。というのも、意味生成と意味使用の過程が象徴システムの使用を介してどのように精神と文化とを媒介しているのかについての説明が不足しているからである。

Bruner (1990) が「人間の心理学の中心となる概念は意味 (meaning) にあり、意味の構成に関与する、その過程と、やりとりにある」(Bruner, 1990, p. 33) と明言した際、彼はこの確信を二つの関連する議論に基礎を置くものとして提示した。

一つ目の議論は、人間を理解するためには、人間の経験と行為が、当人の志向的状态 (intentional states) から如何に形作られるのかを理解しなければならないということである。二つ目の議論は、この志向的状态の形は、文化の象徴体系に参加することを通してのみ具現化される、ということである。

(Bruner, 1990, p. 33)

この引用部の中で言われている志向的状态 (intentional states) とは一体なんであろうか。Bruner がこの議論を展開するにあたって参照している Searle (1983/1997) は、志向性という概念を次のように定義している。

志向性とは世界内の対象や事態に向けられ、あるいはそれらに関わり、あるいはそれらについて生じているような、多くの心的な状態ないし出来事の特長である。

(Searle, 1983/1997, p. 1)

以下に志向的状态でありうるいくつかの状态の例をあげる。信ずる、恐れる、望む、欲する、愛する、憎む、忌避する、好む、嫌う、疑う、いぶかる、喜ぶ、得意になる、気落ちする、心配する、誇る、後悔する、悲しむ、嘆く、罪悪感をもつ、歓喜する、いらだつ …。

(Searle, 1983/1997, p. 5)

Bruner (1990) は Searle (1983/1997) の上述の定義に沿って、志向的状态を「信じる (beliefs)、欲しがらる (desires)、意図する (intentions)、責任を負う (commitments)」(Bruner, 1990, p. 14) といった、心が何ごとかに向かっている状態を包括する概念として解釈する。そして、これらの志向的状态は、言語や記号を主とする文化の象徴体系と結びつくことによって特定の意味を獲得すると主張する。

人間の生活と、人間の精神を形づくり、行為の基底にある志向的状态を解釈可能な体系の中に位置づけることによって行為に意味を与えるのは、文化であって、生物学

的機能ではない。それを成すのは、文化の有する象徴体系に固有のものとして備わっている諸種の様式、たとえば、言語と談話の様式、論理や物語解釈の様式、相互依存的な共同生活の様式といったものである。

(Bruner, 1990, p. 34)

ここに至って意味という概念を中心に据える Bruner の解釈学的心理学の構想は、個々の文化の有する象徴体系に媒介された我々の日常的な行為に向かうこととなる。というのも、人々の行為の基底に仮定される精神の志向的状态と、それらを解釈可能な体系の中に位置づける文化の象徴体系は、我々の日常の行為において合流すると考えられるからである。言葉を換えて言えば、Bruner の強調してきた人々の意味生成と意味使用の過程は、我々の日常の行為の中に組織されると言うことができよう。こうして Bruner の解釈学的心理学の構想は否応なく人々の「生活における日常的行為 (ordinary conduct of life)」(Bruner, 1990, p. 19) に向かうことになる。

文化心理学 (cultural psychology) は、その基点となる定義において、「行動 (behavior)」についての研究ではなく、「行為」についての研究に専念する。それは、志向性に基づいたその対応物としての行為、もっと明確に言えば、状況に埋め込まれた行為、つまり、文化的場面の中に位置づけられた行為、複数の参加者の志向的状态が互いにやりとりする最中に位置づけられた行為の研究に従事する。

(Bruner, 1990, p. 19)

Bruner (1990) の探求の焦点が人々の日常

生活の中での相互志向的なやりとりに内在する意味使用と意味生成の過程に向けられていることが徐々に明らかになってきた。さて、この引用部に示されるように Bruner は文化心理学の探究は、志向性に基礎づいた人々の発話や行為の有り様を捉えるだけでなく、それらの発話や行為が位置づいている状況 (situation) や文化的場面 (cultural settings) といった、人々の発話や行為を取り囲む「より大きな枠組み (larger structure)」(Bruner, 1990, p. 64) を同時に捉え、分析する必要があると主張する。なぜならば、Bruner によれば「これらのより大きな枠組みが、それらが包摂する構成要素を解釈するための文脈を提供する」(Bruner, 1990, p. 64) と考えられるからである。言葉を換えて言うならば、何らかの発話や行為の意味は、それらが位置づく文脈との関係において規定される、ということである。こうした論点を Bruner は次のように説明している。

我々が、ある法則化された方法で意味を解釈し、意味を生成することが出来るのは、我々が特定の意味が生成され交流されるより大きな文脈の構造と一貫性とを明確にすることができるその程度に依存すると私は信じている。

(Bruner, 1990, p. 64)

我々の意味使用と意味生成のプロセスは、志向性に基礎づけられた諸個人の発話や行為のみに帰属するのではない。当のプロセスは、発話や行為の位置づけられる文脈との関係において規定されるのである。それ故、Bruner は次のように結論する。

意味生成の行為に関わる確証的な原因は存

在しないのであって、解釈されることになる行為、表現、そして文脈があるだけである。この事実が我々を問題の核心部へと導く。／文化心理学は、歴史学や人類学、言語学が解釈学的な学問であるのと丁度同じ意味において、解釈学的心理学である。

(Bruner, 1990, p. 118)

7. 混乱と修復のダイナミズム

では、ここで言われる解釈学的心理学は、その探究を一体どのように進めるのであろうか。Bruner は上述の引用に続いて、人々の発話や行為の意味が、それを取り囲む文脈との関係において規定されるという論点を強調して次のように述べる。

この心理学は、人間が文化的文脈の中で意味を生成する際に引き受ける諸種のルールについて探求する。これらの文脈は、常に実践の文脈である。我々は、人々がこれらの文脈の中で何を為し、あるいは、何を為そうとしているのか、について常に問う必要がある。

(Bruner, 1990, p. 118)

この引用文中で言われる人間が文化的文脈の中で引き受けている諸種のルールとは何か。それは、我々が日々の生活の中で他者の発話や行為、ものごとの在り方について、特定の状況下において当然のものともみなすような暗黙のルールである。Bruner は我々が日常生活の中で引き受けているこのような規則を、シンプルに「常識 (common sense)」(Bruner, 1990, p. 35) と呼んでもよいとしている。この点について Bruner は次のように述べている。

文化に根ざした心理学がその中核に据えることは、行為と発話（ないし、経験していること）との間を取り結ぶ関係が、**生活における日常的行為** (*ordinary conduct of life*) の中で解釈可能であるということである。この心理学は、発話、行為、そして発話と行為とが生起する環境との間には公的に解釈可能な適合性があるという立場をとる。言うなれば、我々の発話の意味と、我々が与えられた環境の中ですることとの間には同意された規範的關係というものがある。そして、このような関係が、我々が他者と共に生活していく、その仕方を統制しているのである。

(Bruner, 1990, p. 19)

我々が日常生活の中で交流する発話や行為には、特定の状況下において、どのようなものが適切とみなされ、どのようなものが期待され、どのようなものが当たり前とされているかについての同意された規範というものが機能している。我々が日常生活のいたるところで暗黙に感受するこうした規範を Bruner はフォークサイコロジー、あるいは単に常識と呼んだ。

同意された規範としての常識が我々の日常的な行為の中で円滑に機能することによって、我々は他者との共同生活を、一つ一つゼロから組み立てるのではなく、即時的に組み立てていくことができる。ようするに、特定の行為や活動についての前提を、ある程度共有されたものとして互いに認識し、それを土台として日々の行為や活動を組み立てていくことができる。

だがしかし、これらの同意された規範が破壊される事態もまた我々の日常には馴染みのものである。つまり、常識や通例から外れる出来

事が起こり、期待や想定を裏切る出来事が起こるのが我々の生の実情であろう。しかし、我々の精神はこのような同意された規範の破壊に狼狽えるものの、その不測の事態を何とか理解可能なものにし、平静を取り戻そうとする。Bruner (1990) は、我々が何らかの混乱状況を収束させ、事態を再安定化させようとする精神の志向性こそ、心理学がその中心に据えるべき探求課題であるという。

さらにここには、これらの規範的關係が破壊された時に、元どおりに戻すための交渉の手段もある。このことが、解釈と意味とを文化心理学の、あるいはあらゆる心理学、精神科学の中心的問題たらしめているのである。

(Bruner, 1990, p. 19)

自らの抱いていた前提や常識の破壊に対峙する時、我々は狼狽える。だが、我々はいつまでも狼狽えたままではない。当の不測の事態を何とか理解可能にしようと試み、事態の再安定化を志向して試行錯誤を重ねる。時には、自らが抱いてきた前提や常識を補修することによって平静を取り戻そうとする。あるいはまた、新しい前提や常識を部分的に取り込んだり、新たに作りあげることによって平静を取り戻そうとする。

Bruner (1990) は何らかの混乱状況に対峙した精神が、事態の再安定化を志向し、平静を取り戻そうとする手続きこそが、「解釈と意味とを文化心理学の、あるいはあらゆる心理学、精神科学の中心的問題たらしめている」と主張したのである。

混乱状況に対峙した精神が、事態の再安定化を志向し、平静を取り戻そうとする過程を、本

論では「混乱と修復のダイナミズム (dynamism of confusion and restoration)」と呼ぶことにしよう。この過程はもっぱら個人内の心的行為として進行するものではない。というのも、Bruner が上の引用部で「交渉 (negotiation)」という単語を使用していることに示されるように、この過程は関係的な行為として理解される必要があるからである。さて、同様の主張は別所においても繰り返しなされている。

行為が意図した意味が不明瞭になった場合、自身の逸脱を「弁解する」ための標準化された手段がある。それは、意味をおおやけのものにし、我々が意図していたことを再び正当化するための標準的方法である。我々の談話が如何に曖昧で多義性に満ちたものであっても、それでもなお、我々は意味をおおやけの領域に持ち込み、おおやけの場で交渉することができる。言わば、我々は公的な意味と、解釈と交渉に関わる共有された方法に依拠することによって公的に生活しているのである。

(Bruner, 1990, p. 13)

他者の発話や行為が特定の状況下における常識から外れるものとみなされたとき、あるいは、自らの発話や行為が特定の状況下における常識から外れるものとみなされたとき、我々は、事態の再安定化を図り、精神の平静を取り戻そうとする。この際、他者との間に共有可能な行為や発話の意味を見出そうとする行為は、人間の精神生活にとって根源的なものである。

人間の遂行する「混乱と修復のダイナミズム」は、一般化可能な因果法則として説明することのできる範囲を超えて、無数の可能性の文脈の中に発話や行為の意味を位置づけ直してい

く作業を通して精神の平静を取り戻すプロセスとして理解される。「意味の行為 (acts of meaning)」とはいわば、不測の事態に対峙した精神が、当の事態を理解可能にし、平静を取り戻そうとする可能性の文脈を探し求める行為に他ならない。意味の規定が発話や行為の文脈を参照することに基づいて為されると考える限りにおいて、意味の行為とは、物事の意味が落ち着し得る可能性の文脈を探し求める行為として定義することができるのである。ここに、意味と解釈という概念を中核に据える解釈学的心理学の一つの明白な探求課題が示されることになる。

たとえ、甚大なる個人的犠牲を伴っても尚、人が他者と共に生きていくことを何が可能にせしめ、何がそれを実現せしめているのか…。これこそ心理学の出発すべき原点である…

(Bruner, 1990, p. 32)

ここに至って我々は次のように結論することができる。すなわち、「混乱と修復のダイナミズム (dynamism of confusion and restoration)」の過程こそ、心理学者 Bruner が人間の精神機能の最も重要な側面の一つとして位置づけ、解釈学的心理学がその解明に取り組むべき重要な探求課題として位置づけた問題群だったのである。

8. ナラティブ、それは何を捉える方法なのか

では、Bruner にとってナラティブとは一体何を理解するための方法だったのか。上述の我々の結論を敷衍するならば、Bruner におい

てナラティブとは、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程を理解するための媒体である、ということになる。すなわち、不測の事態に対峙した我々の精神が、どのように当の事態を理解可能にし、平静を取り戻そうとするか。その過程を理解するための手段としてナラティブが位置づけられることになる。この言明を裏づけるための Bruner の言葉をいくつか引いておこう。

物語は、例外的な振舞いに、主人公の志向的状态…と何らかの文化の規範的要因…との双方を含ませる仕方で意味を与えるように構成される。物語の機能は、規範的な文化的通例性からの逸脱を緩和し、あるいは、少なくとも理解可能にするような志向的状态を見つけだすことにある。

(Bruner, 1990, pp. 49-50: 強調原文)

物語は、期待されていたことに対する、期待されていなかったことによる侵入を叙述する。物語は共有された通例性 (ordinary) の破壊 (violations) に関わっており、これらの破壊がどのようにして解決されるか、に関わっている。1つの物語は、その特徴として、共有された通例性としての、何らかの前もって予想される前提から始まる。そして、前提の破壊へと移っていく…そして、はじめの通例性を修復 (restoring) していくか、あるいは、新たな前提を作り上げる (creating a new version) ために取り上げられた主題を展開していく。そして最後に、1つの解決がもたらされる。

(Bruner, 2008, p. 36)

精神生活というものはどこへ行っても、当たり前さと、予期しないこととの間の、平凡さと、例外との間の、絶え間ない弁証法のように思われる。物語というものは、両者を文化的に、そして認知的に、処理可能な様式に翻訳するための我々の自然な方法のように思われる。

(Bruner, 2008, p. 37)

Bruner にとってナラティブとは、人間が「混乱と修復のダイナミズム」の過程で、特定の物事についての何らかの意味を発見するための文化的手段の一つに他ならない。同時に、人々のナラティブを探求することを通して、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程が理解可能になる。ここに至って人々が自らの世界をどのように解釈し、さらに、我々研究者が人々の解釈という行為をどのように解釈するか、という Bruner の解釈学的心理学の探求に資する一つの方法論が与えられたことになる。

9. 意味の行為の先にあるもの

では、Bruner は「混乱と修復のダイナミズム」として叙述することのできる人々の「意味の行為」の解明の先に、一体、何を見ていたのか。我々はこの問いに対する応答を、Bruner 心理学が内包する平和への眼差しとして理解する。Bruner のテキストに当たっておこう。

人類は、恨み辛み、派閥争い、合併、変転する協定関係に伴って生じる利害の衝突に永遠に苦しめられるだろう。だがしかし、これらの手に負えない現象について興味深いことは、これらの現象が如何に我々をバラバラにするかではなく、それにもまして

如何に多くの場合、これらの現象が中和され、許容され、恩赦に組するか、ということである。…人間について言えば、驚くべき物語の才を持つ人類にとって、平和維持の主要な方法の一つは、いつも通りの生活の中に生じる衝突の脅威を緩和する状況を提供し、表現し、展開するための人間の物語の才にある。

(Bruner, 1990, p. 95)

Bruner のテキストの端々から感受されるロマン主義的な印象の背後には、人間の精神の「混乱と修復のダイナミズム」の過程を理解しようとする彼の解釈学的心理学の探求課題と、その先に展望される平和への眼差しがあるのである。人間が他者とともに平穏な生活を営んでいくために、精神が果たし得るその機能は何か。この問いこそ、Bruner がナラティブという概念に見出した可能性の原点にある問いであり、彼の構想した解釈学的心理学の支柱となる問いだったのである。

文献

- Amsterdam, A. G., & Bruner, J. S. (2000). *Minding the law*. Harvard University Press.
- Bruner, J. S., Goodnow, J. J., & Austin, G. A. (1956). *A study of thinking*. John Wiley & Sons.
- Bruner, J. S. (1960). *The process of education*. Harvard University Press.
- Bruner, Jerome S., Olver, R. R., & Greenfield, P. M. (1966). *Studies in cognitive growth : a collaboration at the Center for Cognitive Studies*. John Wiley & Sons.
- Bruner, J. S. (1983a). *Child's talk : learning to use language*. Oxford University Press.
- Bruner, J. S. (1983b). *In search of mind : essays in autobiography* (1st ed.). Harper & Row.
- Bruner, J. S. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Harvard University Press.
- Bruner, J. S. (1990). *Acts of meaning*. Harvard University Press.
- Bruner, J. S. (1996). *The culture of education*. Harvard University Press.
- Bruner, J. S. (2002). *Making stories : law, literature, life*. Harvard University Press.
- Bruner, J. S. (2006). *In search of pedagogy Volume I II : The selected works of Jerome Bruner*. Routledge.
- Bruner, J. S. (2008). Culture and mind : their fruitful incommensurability. *Ethos*, 36(1), 29-45.
- Eisner, E. (Ed.). (1985). *Learning and teaching the ways of knowing*. University of Chicago Press.
- Murray, M. (2000). Levels of narrative analysis in health psychology. *Journal of Health Psychology*, 5(3), 337-47.
- Polkinghorne, D. E. (1988). *Narrative knowing and the human sciences*. Suny Press.
- Sarbin, T. R. (1986). *Narrative psychology: the storied nature of human conduct*. Praeger Publishers/Greenwood Publishing Group.
- Scaife, M., & Bruner, J. S. (1975). The capacity for joint visual attention in the infant. *Nature*, 253(5489), 265-266.
- Searle, J. R. (1983). *Intentionality: an essay in the philosophy of mind*. Cambridge University Press. 坂本百大 (訳). (1997). 『志向性——心の哲学』. 誠信書房.